天候魔導士

sky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天候魔導士

【Ｎコード】
Ｎ５４６９Ｙ

【作者名】
ｓｋｙ

【あらすじ】
いろんなギルドを渡り歩いて過ごしてきた主人公・アキ。
そろそろ良いギルドに落ち着こうと思っていたとき、
あの有名ギルドのメンバーに出会って・・・

ＦＡＩＴＲＹ　ＴＡＩＬ　二次創作！

はじめに

こんにちは。はじめまして。
ｓｋｙと申します。
今回が初めての投稿なので、言葉がおかしかったり、
間違えたりするかと思いますが、最後まで読んで欲しいと思います。
今は中学生なので、不定期更新になります。
これは、ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　の二次創作となります。
原作のストーリー通り進んでいきます。
始まりは、ナツたちがシロツメから帰ってくる道中です。
主人公（アキ）目線で物語を書いていくので、ナツたちと別行動をしていたら、
ナツたちは出てきません。
文章を読んでいて、良いところや直した法がいいところが有りましたら、
遠慮なくコメントお願いします。
もともとは作者（わたし）の妄想からできたものです。
行き当たりばったりの物語になりますが、どうかよろしくお願いします。
長くなりましたが、（駄文になるであろう）この小説を見ようとしていただきありがとうございます。
がんばってあげていくのでゆっくり読んでいってください。

主人公設定（更新あり）（前書き）

本編が進んでいくだびちょくちょく更新していきます。

主人公設定（更新あり）

名前
　アキ・ディオサス
魔法
　天候魔法・翼（エーラ）
　その他所持（ホルダー）系魔法
好きなもの
　美味しい水
嫌いなもの
　悪天候
性別
　女
容姿
　茶髪のショート
　顔は整っている
　黒目
　つり気味の目
　身長１６０？くらい
　紋章は灰色・左腕
服装
　まあ、いわゆる動きやすい格好
　背中にリュックサック（所持系魔法が詰まってる）
その他
・天候魔法には広範囲攻撃が多いため、
　よく味方も巻き添えにする
・自分で非公式に所持（ホルダー）系魔法を作ったりする
・→何を作ったのか覚え切れていない
・男勝り

・男口調
・（容姿や、男っぽい性格から）よく男と勘違いされる
・雲の上に乗ることができ、そこでごろごろしていることが多い。
（なので、見つけてくれる人はハッピーくらいしか居ない）
・年齢不詳

第1話

「ふわぁ～…よく寝たぁ～。」
今日の天気は雲り。しかし、今俺の目の前には、雲ひとつ無い真っ青な空が広がっている。
それもそうだ。俺は今雲の上にいるのだから。

俺の魔法は『天候魔法(ウェザーマジック)』。これは失われた魔法(ロストマジック)だ。
この魔法には二次能力が有り、その能力は雲に乗れるということだ。
ギルドに加入していない俺は、暖かい日差しの下で、日向ぼっこをしていた。
「はぁ～…。暇だなぁ…。」

今まで1つのギルドに5ヶ月以上いたことは無い。
中小規模ギルドでは（ロストマジック使いだからって）避けられるし、
大規模には縁がなかったし…。

「金ねぇしなぁ…。やっぱ、ギルド入んなきゃだめだな。
次を最後にしよう！良いギルドで落ち着くか。」

「てゆうか、ここはどこだ…？」
俺は背中のバックの中身を一回出して、最近作った魔法を探した。
自分の現在地がわかる地図を小型し、指輪魔法(リングマジック)にした魔法だ。
「ん～と、ここは”シロツメ”の南の森か。んじゃ、降りますかっ。」

そういうと、俺は雲から降りた。

第1話（後書き）

展開が速くてすいません。
文にするの苦手なもので・・・

第2話

雲から降りたあと、あっけなく道に迷った。
「ヤバイな…。誰かいないか…？」
（てゆうか、こんな森に人なんているのか…？）
そう思いながらも耳を澄ましたとき、

？「・・・・・・・」
？「・・・・・・・・・」

「！？　誰かいるのか！？」

もう一度耳を澄ました。

？「・・・・・・・」
？「・・・・・・・・・」

「…北か？」
昔から耳がよく、静かなところでは結構な距離が聞こえるため、
今回も距離がわかった。

警戒されてはいけないため、静かに近づいた。
女「ねえナツ～、少し休もうよ～」
猫「あ～！ルーシィまた言ってるよ！」
男「さっきも休んだじゃねーか。なあハッピー」
いたいた。
えっと…男と女と…しゃべる猫？
しゃべる猫ってあいつ以外にいたのか…
まあ、人がいたのはラッキーだ。

早速話しかけて…
!?　あの女の手の甲の紋章…
妖精の尻尾(フェアリーテイル)!?
マジかよ!超有名どこじゃねーか!
こりゃマジでラッキーだ。

俺「あのー、すいません。」
女「へ?」
俺「何かお困りで?」
女「だ、誰?」
(やっべー!これすっげー怪しいじゃん!)
俺「あ、いえ、ちょっと話が聞こえたもので・・・
何も怪しいものではありません・・・!」
(てゆうか十分怪しいだろ俺)
女「んじゃ、ギルド(マグノリア)まで送ってってくれる?」
俺「へ?あっ、はい!」

第3話

いよっしゃぁ！！
すげーなこの展開！！！
まさかすぐ出会うとは…

女「あの～、頼んどいて何なんですけど、大丈夫？」
俺「はい。一応　空の運び屋やってたんで。」
これはホントの話だ。
ギルドに入ってないときはそうやって一稼ぎしていた。

俺「んでは、やりますね。
　ウェザーマジック　クラウド！」
まあ、名前の通り、雲を出す魔法だ。

モコモコモコ…
女「ひゃっ！？く、雲？」
俺「はい！人も乗れる雲です。」
男「の、乗り物かよ…」
猫「ナツ乗り物弱いもんね」
俺「大丈夫です。今まで酔った人いませんから」
男「いやぁ…」
俺「さあ乗って乗って！」
そう言うと、俺は無理やり3人を乗せた。

しばらく一緒に過ごしているうちにタメで話すようになった。
女「わぁ～！すごーい！！」
俺「あんまり端に行くんじゃねーぞー。落下するからなー」
男「これはすげぇなー。ハッピーでもこんな高さまで来れないから

な」
猫「あい」
まあ何とか普通にギルドに向かってるな。
ラッキーラッキー。
俺「あっ、自己紹介忘れてた。
俺の名前はアキ。　よろしく。」
女「うん。私、ルーシィ。」
男「俺はナツ。こいつはハッピー。」
猫「あい！」
俺「よろしく。」

ルーシィ（以下ル）
「あっ！お礼どうしよう…お金ないよ～」
俺「金はいいさ。その代わり、ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　に入れて欲しいんだ。」
ナツ（以下ナ）
「別にいいんじゃねぇの？」
俺「おう。サンキュー。」

ってマジかよ！！
こんなに簡単に入れんの？
だったらもっと速く行ってりゃよかった…
ま、なんかすげーラッキーだな。。。
俺「もうすぐマグノリアに着くぞ～」
ル「ありがと、アキ」
ナ「サンキューな、アキト」
俺「？　アキト？　俺のことか？」

ナ「当たり前だろ」
俺「俺の名前アキなんだけど…」
ナ「別にいいじゃねーか。そっちのほうが呼びやすいし」
俺（おいおい…）

第4話

マグノリアについた頃には、もう真っ暗になっていた。
俺「うわ、こんなに時間かかるとはな…」
ル「それじゃ、ギルドには明日行こう。もう暗いしさ」
ナ「ああ、そうだな。あ、アキト今晩どうする？」
俺「あ！すっかり忘れった。どうすっかな…」
もっと速く着くと思っていたので、泊まる場所なんか考えてもいなかった。
ナ「だと思った。だったらルーシィん家泊まればいいんじゃね？」
ル「ちょっと！勝手に決めないでよ！」
俺「そうだな。ルーシィ、今晩よろしくな」
ルーシィのちょっと待ってよ～　という声を聞きながら、俺はナツから貰った地図を片手にルーシィの家に向かった。

さして時間もかからずに到着した。
俺「ここがルーシィの家か～。いいとこだなってうわっ！？」
後ろから急にルーシィが現れたため、俺はかなりビビった。
俺「ちょっ！急に出てくんなよ！ビックリしただろうが！」
ル「よかった～。勝手に家ん中入っていなくて。」
俺「ん？どうゆうこと？」
ル「あ、いや、ナツとハッピーが家の中に勝手に入ってたことがあってさ…」
俺「へ～。んなことがあったんだ」
ル「うん。ま、とりあえず家の中入ろっ！」
俺「お、おう」

ル「ただいま～！」
俺「お邪魔します…」

ナ&ハッピー（以下ハ）
「おかえりー。遅かったな」
ル「って、何で居るの～！？」
俺「あ、ナツとハッピー。どうやって入った？」
ナ「普通に窓から」
ル「普通玄関でしょ！ていうか普通は勝手に入らないし！」
俺「ははは…」
このやり取りに俺は苦笑しかできなかった。

第４話（後書き）

すっかり会話文が多くなってしまいました…
遅くなってすみません。

第5話

翌日・早朝。
俺「ふわ～。もう朝か…」
昨日は風呂借りたあとすぐ寝てしまった。
だから、今日はいつもよりも2時間ほど早く起きてしまった。

とりあえず、泊めてもらったお礼にと部屋を片付けた。
片付けてたら時間がなくなったので、俺はルーシィを起こすことにした。
俺「おーい。ルーシィ起きろー！」
ル「ん…？何…？」
俺「朝だって！起きろ！」
ル「だれぇ…？」
俺「アキだ！とっとと起きろ！」
この一言でルーシィは飛び起きた。
ル「はっ！！何でいるの？」
俺「『何でいるの？』じゃねーよ。昨日泊めてくれたじゃねーか」
ル「あ…そうだ。忘れてた」

俺「朝食作っといたから」
ル「えっ？うそ！ありがとう」
早起きしたので時間がかなりあったから2人分作っていた。
俺「とっとと食えよー。片付けっから」
ル「何から何まで…。ありがと」
俺「え？あ、ああ。どういたしまして」
お礼なんか久しぶりに聞いたものだから戸惑ってしまった。
ル「ご馳走さま～。美味しかったよ～。片付けまでありがと！」

俺「いやいや、泊めてもらったんだから当たり前。」
という俺の言葉に重なって、外から大声が聞こえた。
ナ・ハ「ルーシィー、アキトーギルド行くよー！！！」
俺「おう。りょーかい。」
ル「ちょ、ちょっと、まだ私準備してないんだけど…」
俺・ナ・ハ「先行ってるよ～」
ル「待ってよ～！！」

ハ「ここが妖精の尻尾（フェアリーテイル）だよ」
俺「でっけーなー」
ここでようやくルーシィが到着した。
ル「ハア、ハア…。何で置いていくのよ～！！」
ハ「ごめんね。アキトを早く連れてきたかったからさ」
俺「ワリ。ごめん」
ナ「んじゃ、入ろうぜ」
生まれて初めて入るでっかいギルド。
俺は新しい1歩を踏み出した。

第5話（後書き）

次回、とうとう魔導師ギルド　ＦＡＩＲＹＴＡＩＬ　に入ります！

第6話

ル「おはよーございまーす！」
ルーシィに答えたのはこのギルドの看板娘・ミラジェーンだった。
ミラジェーン（以下ミラ）
「おはよう、ルーシィ。ナツ、ハッピーも。」

おお、本物のミラジェーンだ…
すっげーなぁおい。
って、え？こっち見てるし！！

ミラ「ナツ、そっちの人は？」
ナ「ああ、こいつな、ここに入りたいって言ってんだ」
俺「アキ……です。」
ミラ「アキ君、だね。よろしく！」
俺「ああ。よろしくです。」

初めてこんなにすんなりギルドに入れた。
久しぶりだな…こんなに初見の人としゃべったの…
このギルドなら馴染めそうだな（微笑）。
でも、俺、ホントは『君（クン）』じゃないんだけどな…

と、物思いにふけっているとき、誰かに後ろから追突された。
その衝撃により、バッターンという大きな音を出してモロ顔面から床に倒れこんだ。
数秒気を失ったが、何とか起き上がると、俺は怒鳴った。
俺「ってぇな…。チッ、誰だよこの野郎！！」
これに答えたのは黒髪の上半身裸の男だった。
男「あ？誰だ、アンタ」

俺「おめーこそ誰だよ！？」
ル「ほらほら、喧嘩しなーい。こっちの彼は…」
と言いながら、俺に手を向ける。
ル「アキト。それで…」
今度は、ぶつかってきた男に手を向け、
ル「こっちはグレイ。アキトはついさっきここに着たばかりなの。」
グレイ（以下グ）
「何だ、新入りか。グレイ・フルバスターだ。それじゃ、よろしくな。アキト」
グレイと呼ばれたその男は、いつの間にか下も脱いでいたらしい。
女「グレイ、服」
グ「うわぁお！？」
グレイに注意した女性は酒樽１つを真横に置いてこう言った。
女「私はカナ・アルベローナ。アキト、よろしくね」
俺は２人に向き直って言った。
俺「グレイ、カナ、よろしく。　っていうか俺の名前アキだから！
アキトじゃないから！」

もう伝染してるし…
アキトっていう呼び方が。

第6話（後書き）

ホントはそろそろエルザさんが出てきてもいい所なんですけど、たぶんエルザさんしばらく出てこないかもです…

第7話

ギルドにいたメンバーの自己紹介が大体終わった頃、ミラジェーンに呼ばれた。
ミラ「アキくーん、ちょっと来てー」
俺「あっ、はーい。　何だと思う？」
後半は周りのみんなに向けた言葉だ。
しかし、その問いはすぐにルーシィに答えられた。
ル「ああ、それなら。あたしもつい最近やったよ」
俺「やるって…何を？」
ル「それはいってからのお楽しみ。さあ、いったいった」
といわれながら背中を押された。
よく分からない恐怖を感じながら俺はミラジェーンの前までいった。

俺「はい。何ですか？」
ミラ「えっと…ちょっと待ってね」
と言うと、なにやらカウンターの下（中？）を探し始めた。
なにをやられるのかとドキドキして待っていると、箱を取り出した。
中身は結構小さいようだ。
俺「えーっと、これは？」
と、俺が聞くと、ミラジェーンは笑顔で答えた。
ミラ「紋章を入れるスタンプよ」
俺「へっ？スタンプ？」
ミラ「ええ。あなたは何色がいい？それと、場所も」
俺「ああ、そういうことですか。えーっと…」
俺は悩んだ。他のギルドで使っていた場所・色をそのまま連用するか、それとも、まったく新しいものにするか…
そんな俺の心の葛藤を知ってか知らずかミラジェーンはこう言った。
ミラ「別に他のギルドで使っていたのでもいいし、色はそのままで

場所だけ変えるっていう手もあるわよ」
それを聞いた俺はすぐさま聞いた。
俺「これって、”灰色”ってのはできますか？」
彼女は少し驚いた顔をしていたがすぐさま頷いた。
ミラ「うん、もちろん。でも珍しいね。滅多にいないよ。灰色ってのは」
俺「あっそうですか。今までずっとこの色だったので。」
ミラ「場所はどうする？」
俺「左腕…二の腕辺りにお願いします」
ミラ「分かった。それじゃ押す場所出して」
二の腕を出したら、すぐにスタンプが押され、灰色の紋章がくっついた。
ミラ「これであなたもフェアリーテイルの一員よ」
俺「おお。凄くうれしいです！ありがとうございます！」
と、今まで敬語でしゃべっていたら、いきなりミラジェーンが言った。
ミラ「ずっと思ってたんだけど、敬語じゃなくていいわよ」
俺「えっ、あっ、そうですか？分かり…分かった。」
ミラ「うん。あと、呼ぶときもミラって呼んでね。」
俺「はい。俺はアキで。」
ミラ「わかった。アキトね。」
俺「違います。アキです！」
ミラ「アキトだよね。」
俺「違～う！」
という会話を何分か繰り返したが、とても直しそうには無かったので、
俺はミラの間違いを訂正するのは諦めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5469y/

天候魔導士

2011年12月19日19時50分発行